

## ●「朝」(東京都) 42号

「朝」は、初めて読む同人雑誌だが、軽さの中に味がうま  
く散りばめられている不思議な洒脱感がある。前半は小説  
創作、後半は「コロナ禍と東日本大震災から10年」という  
エッセイ特集を編んでいる。村上玄一氏が発行人となつて  
いて、前半でも「自慢風まかせ5」を小説として書いてい  
る。この内容は学習研究社発行の「季刊フェミナ」「小説  
フェミナ」の副編集長としての活動をエッセイ風に記録し  
たもので、当時の雑誌作りの事情がありありと伝わってき  
ておもしろく読ませるが、単なる記録としての文章以上に  
何が残るかという点、それ以上には響いてこない淡白さが  
感じられる。これはこれで一つの姿勢でいいが、エッセイ  
も含めてそれがこの誌に通底する一つの傾向とも言える。  
それを踏まえ、この傾向の味を引きずりながらも、巻頭  
の「夢で会いましょう」(天野いずみ)は、よくまとま  
った姿を作っている。このタイトルは昔テレビ番組であつた  
気がし、この軽いニュアンスのタイトルを半信半疑で読み  
始めたが、夢で性交する出だしから始まって、高校時代に  
廻り淡い恋の奥に潜んでいたものをあらためて夢を通して

掘り出す過程は、自然で流れがいい。クラス会をうまく布  
置し、彼に再会することを期待して幹事役に尋ねた結果が  
「死んだ」という答になって返ってくる。夢が間接的に死  
を知らせる現象と重なってくる。修学旅行での二人で見上  
げた星空の美しさと、最後に死を知らされて眺める星空の  
呼応とが生きている。やや中間小説のニュアンスもあるが  
優秀作としたい。

## ●「九州作家」(福岡県) 134号

一三四号という号数は、敬意に値する。持統号数はおそ  
らく日本でベストテンに入るだろう。この誌は、医学関係  
の専門知識も匂っていて、医師や法律関係の知識人が同人  
に揃っている気配がある。七十人近い同人数にも驚かされ  
る。

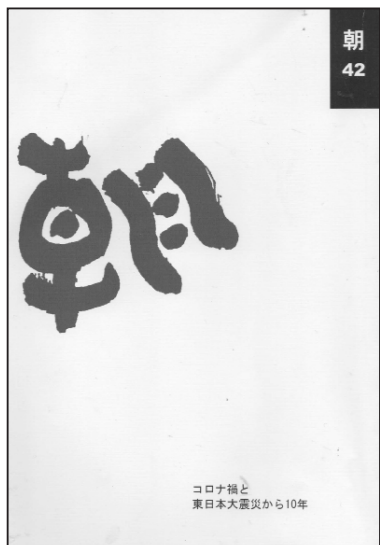
巻頭の「法殺考」(波佐間義之)は、問題提起小説である。  
八五歳以上の重度介護老人は、医療によって安楽死させて

もよいという法律が国会で通り、それを実行する医師の内  
部の葛藤を描いている。今後老人の人口比率が増し、老人  
医療が財政を破綻させる懸念から、老人人口を意図的に減  
らす方向に舵を切る政治は、あなたがち想定できなくはない。  
ただ、そこへ行くまでもう何段階かを踏まえるだろうと  
は思うが、この小説はそれが決定されたところから始まっ  
ている。そこからは、小説としてよく流れ、テーマが重い  
だけに興味深く進行する。最後は新人看護婦のヒューマニ  
ズムによって、安楽死を施した患者が救われ、医師もあら  
ためて良心に目覚めるのだが、小説として解決していても  
全体に何か重い澱みが残る。それは、現在も増え続ける老  
人人口が厳然とした問題を抱えていて、なお深刻化してい  
るのが現実であるからだろう。この根本解決は、物理的な

処理以上に、良心の拠り所をどこに置くか、むしろ文学的  
な問いを深めることにあるはずで、この主人公だけの良心  
の目覚めでは補えない。作品としての評価も、法案が国  
会を通ったこの想定を、是とするか非とするかで異なっ  
てくる。判断の難しいところで、推薦作にすることでひと  
ずの評価にしたい。波佐間氏はすでに九州でも知られた存  
在であり、銀華文学賞でもまほろば賞でも実力を発揮して  
いる作家なので、この老人問題の深淵を文学作品にしてい  
くことには大いに期待したい。

## ●「札幌文学」(北海道) 91号

一〇〇号に近づいてきた札幌文学だが、内容も健在で、  
今号は特に充実している。巻頭の「『よもつ耶』と更待月  
のこと」(海邦智子)は、変わったタイトルからして独創  
性を感じられる。愛妻と子供を一度に失って悲しみに暮れ  
る男を「よもつ耶」という寄合の場が癒す設定だが、部屋  
がみな月の名前になっていたり、あの世とこの世の境を象  
徴していて、場そのものに雰囲気がある。そこに住んでタ  
クシーの運転手のような仕事をしていくこの男に、やはり  
変わった乗客が乗ってくる。最初に乗せた老婆は、不倫の  
恋をして、たくさんの人を裏切つて恋を成就させたが、そ  
の男に先立たれてしまう。「たくさんの人を傷つけて、裏  
切つて……」「あの人の家族にとつては、私は人殺しでし  
かありません」という重荷を背負つて生きている。死を待



つ人。死の向こうに引き込まれていくことを願う人が乗客なのだ。次に乗ったのは大蔵山シアンツェでいつもジャンプをしていたスキー選手の母親。毎日夜遅くまで練習しているその息子が、この世からいなくなり、それを追うために、「大倉山へ」と目的地を告げる。ジャンプ競技場で死んだ息子を思い出す。「札幌の街どこか、空に飛んで行っちゃったわ。私を置いて……。あの子と二人きりでずつとやってきたのに」と死者の世界へ吸い込まれる。また次には「金まみれ」の男を乗せる。金を追い続けた男の孤独は、やはり死の世界へ向かう冷たさに浸されている。またある晩若い女性を乗せるが、彼女は結婚直前、横断歩道で自分を車から庇うため身代わりになって死んだ男を忘れられずに、冥界の境を彷徨っている。これらの「送り届け」は、冥界への道として意味深い意味を有していて、深い悲しみを湛えつつ、何か死への投身が感じられるところに独特の旋律が流れている。最後は、自分自身を乗せ、また死に別れた妻と子供を後ろの座席に乗せて車を発進させる。確かにこの世とあの世の境目を彷徨う魂は存在する。そこに深い詩情を重ねて死へ送り届けることよって深く奏でられる小説構造は、哀切な魅力となつて響いてくる。優秀作である。文章も飛躍性と詩性が兼ね備わっていて、筆者でなければ紡げない、一つのスタイルを獲得している。

また今号には、巻末に柴田耕平氏の「幕末えれじい 衝

も、別な様相を呈して立ち上がってくる。氏の業績はどこかで賞揚されるべき価値がある。胸に留めておきたい。

●「全作家」(東京) 120号

全作家文学賞佳作の「鳥の名残」(漆原正雄)は不思議な味のある作品で、見えない鳥の気配がいつも自分のそばにいる設定が、おもしろい。こういう前提は、書きすぎると味や雰囲気が消されてしまつて、失敗する危うさがあるのだが、この作品はその距離をうまく保ちながら、一つの生きた存在をそこに動かしている。鳥の羽ばたきやそれが起こす風の動きが身近に、そして何か温かさを持つて息づいている生命感がいい。はつきりわからないが、確かにそこにいるという温かい隣接感が、生身の癒しとして生動している。このおもしろい抽象感が漲っている。登場人物も、奇妙な抽象性を帯びて動いている。アパートの大家の「エリザさん」という変わった名の老婆も、主人公には見えないこの鳥が見



鋒隊始末(1)」が載っている。これは幕末の幕府軍の連隊「衝鋒隊」の顛末を梶原雄之助という人物を軸に描いていく歴史小説だが、実によく詳細を叙述している。山岡鉄太郎から相撲の鉄砲や四股を習う導入から、フランス軍方式で兵としての教練を受ける場面、鳥羽伏見の戦いの顛末、江戸に戻ってきてからの連隊そのものの逃亡、陸軍総裁の勝海舟の対応とその後の江戸城開城への心理的影響など、微細にわたって展開している。一体どこからこのような資料を得ているのか、驚嘆するほどの細かく具体的な叙述である。これを読むと江戸城開城がまったく別な面から浮かび上がってくる。筆者の資料収集力と粘り強い追求力、構成力には脱帽する。たまたま筆者の著書「幕臣たちの肖像」も手元に届き、それも併せ読むと、いつそう鮮やかに幕末の生きた世界が現代に蘇ってくる。勝海舟の遠謀深慮もあらためて追ってくるばかりでなく、明治維新そのもの

## 作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします

懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!  
八寛正大(新潮新人賞)・大高雅博(群像新人長編小説賞)・都築隆広(文學界新人賞)・小浜清志(文學界新人賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞)

「文芸思潮」の読者にはメンバーが特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩		小説	
1篇 A4用紙2枚以内	3000円	1篇 20枚まで	7000円
<b>エッセイ</b>		50枚まで	10000円
1篇 5枚以内	4000円	100枚まで	15000円
10枚以内	5000円	200枚まで	20000円

- ご希望の作家と面談指導も可能です。
- ご希望の方には案内書を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局  
〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13  
TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848  
bungeisc@asiawave.co.jp

全国同人雑誌振興会



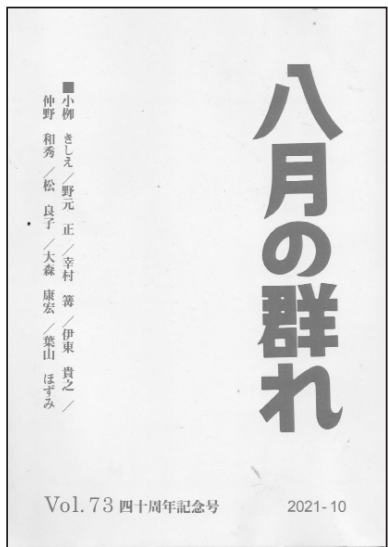
える」と言う。また見えるかどうか診断を求めた町の動物医師も「見える」と言い、この鳥が妊娠していて、やがて「子を産む」と診断する。「卵」ではなく「子」だと言う。こうした周辺のわけのわからない抽象性が、ある体温を伴って温かく流れていくのがこの作品の魅力であり、作者の持ち味だろう。後半になって「名残」より「余り」だろうと認識を変化させているが、これは必要がなく、やや勇み足。また最後に老婆を登場させて書店の明かりを消すことで閉じているが、この結末をもっとインパクトがあるものにしていれば、作品の奥行きが広がっただろうと思われる。この「鳥の名残」に何を託すか、何の象徴なのか、筆者がどこまでそれを掴んでいるのが、伝わってこないのが結末を弱くしている。この象徴的方法を自覚して駆使できるならば、筆者はもっとこの小説世界を大規模に動かすことができたはずである。これを書いた時点では、まだ掴み切っていないように想われる。これを示すラストに変えてくれれば、優秀作と見ることができると思う。「全作家」もいい筆者を見出しているように思った。

●「八月の群れ」(兵庫県) 73号

今号は力作が揃っている。「あと恐ろし」(小柳きしえ)は、八〇枚に迫るボリュームで、中国へのビジネス進出の話を中心にダイナミックなストーリーが展開する。ここには中国の発展する社会が垣間見え、そこで働こうとする

ばれ学生結婚をして、性格の違う軋轢を抱えながら、因縁として生きていく過程を描いているが、男女の結びつきの隠れた負の部分も照射しつつ、その重い成り行きを引き受けてつづいて人生を進んでいく一つの宿業は、浮かび上がってくる。性愛の逃れられない姿は書いているが、それから逃れる自由も示すことができれば、人生に向ける眼差しはもっと深く示せたかもしれない。準優秀作。

葉山ほずみ氏の「暁の海」は、まだ武士の時代だろうか、村に捨てられた子供を主人公にしている。筆者の不遇な存在への視線はどこまでも温かく、食にも衣にもこと欠く哀れな子の生を見つめる目は希求に繋っている。村は天候不順のため飢饉に襲われ、それを救う神頼みに、ヤッコという主人公は生贄にされる。それから逃れ、最後に海に飛び込んで、海という大きな広がりの中に包まれていくストーリーだが、この物語構造の中には、葉山氏の不遇な存在への根本的な哲学が垣間見える。何も救いがないうとき、せめて自然の懐に生まれ、帰属することで、その運命の贖いを得るといふ最後の救いだ、ここへ行く前に、小説や物語としてはもっとできることがあるのではないだろうか。運命は、誠実で前向きなひたすらな生き方に向けて、ときとして微笑むことがある。それは、与えられた運命に身を投じることの中に劇的な展開を見せてそれまでを転換させる輝きを生じる。例えばこの子が身を投じた海で、通りか



新世界への挑戦が、小説を推進していく。それは結局中国人のしたたかなビジネス根性に跳ね返されるのだが、現場の生々しい策略の見え隠れに吸引力があり、その迫力に読者は引き込まれる。ここには確かに中国に進出していった日本人と日本企業の生の軌跡の一部が記されている。ただ、文学としてこれを見た場合、引き込まれるのは中国へビジネスを展開させるその進出に暴露される人間のやりとりであって、人間そのものへの掘削ではない。海外へのビジネスは描かれていても、人間の生きることへの洞察はなされていない。それは、この小説全体が、記憶を失いかけていくことへの防御としてあえて思い出そうとしている設定の弱さに起因する。この小説に、記憶を補強するためという前提は不要だろう。力は入っている。準優秀作。

野元正氏の「柵の葉」は、若い二人が柵の大樹の縁で結

かった台湾など外国の船に救われることも物語としてはあるだろう。龍宮という手もある。大地震から逃れることもあるかもしれない。不遇だからこそ、新たな運命にも恵まれる。そのほうが物語として豊かではないだろうか。根本的な哲学を示しておくのも悪くはない。しかし希望のカタルシスへの展開も、文学の可能性ではあるだろう。そのほうが葉山氏らしいとも言える。優秀作への大きな可能性を孕んだ準優秀作。

今季をまとめる。

優秀作

「夢で会いましょう」天野いずみ「朝」42号

「『よもつ耶』〜更待月のこと」海邦智子「札幌文学」91号

「鳥の名残」▲ 漆原正雄「全作家」120号

推薦作

「法殺考」 波佐間義之「九州作家」134号

特別作

「幕末えれじい 衝鋒隊始末(1)」柴田耕平「札幌文学」91号

準優秀作

「あと恐ろし」 小柳きしえ「八月の群れ」73号

「柵の葉」 野元正

「暁の海」◎ 葉山ほずみ

(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)